

共同住宅建設に伴う

宮ノ下遺跡第6次発掘調査概要

例言

1. 本書は東大阪市長堂1丁目70-1・70-9で、平成7年4月12日から同年6月29日の期間に行われた共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第6次発掘調査の結果をまとめたものである。同調査は共同住宅の施工主である明田初幸氏から財団法人 東大阪市文化財協会が委託を受け実施した。調査経費は、明田氏のご負担による。
2. 現地の調査、調査結果の整理、および本書の作成は、同協会の松田順一郎、松宮昌樹が行った。外業の補助員として、宮島仟が従事した。出土遺物実測図は藤井文子が作成した。
3. 調査地の水準点の設置業務は国際航業株式会社に委託した。
4. 調査にあたってご協力賜った委託者の明田初幸氏をはじめ、現場管理者の生和建设株式会社、掘削作業を行った株式会社 青葉の方々に感謝いたします。

目次

1 調査に至る経過、調査の経過	1
2 調査結果の概要	2
2.1 堆積層と遺構	2
2.2 14世紀以後の遺構	2
2.3 13世紀の遺構	7
2.4 出土遺物	8
3 まとめ	9
出土遺物写真・実測図	10



中世遺構の検出作業風景

1 調査に至る経過、調査の経過

宮ノ下遺跡は、大阪府東大阪市の近鉄布施駅の北側直径約300mの範囲で、長堂、足代新町にあたる。これまでの発掘調査で、縄文時代晩期から近世までの遺構・遺物が検出されてきた。平成7年に、大阪府東大阪市長堂1丁目70-1・70-9(図1)で共同住宅建設が計画されたが、同地は宮ノ下遺跡範囲内にあり、建設工事によって地下の埋蔵文化財を破壊するおそれがあったため、東大阪市教育局によって試掘調査が行われた。その結果、鎌倉時代の瓦器碗が多数出土したため、施工主は発掘調査を財団法人 東大阪市文化財協会に委託し建設工事に先だって発掘調査を行った。

発掘調査は、共同住宅建設予定地内の287.5m²を対象とし、平成7年4月12日から、試掘調査の結果に基づき、地表下平均約0.8mまでをバックホウで掘削し(図2)、おもに現代の盛土、近代の耕作土を除去した。ただし、調査地の西部で中世の遺構面が約60cmの盛土下で検出された。それ以深では中世の遺構・遺物がみとめられ、平均深度約0.4mを人力掘削して精査し、14世紀の耕作地跡、13世紀前半の建物跡、耕作地跡などが、2、3の検出面でみとめられた。これらの遺構・遺物の調査後、調査区の東西両辺の壁沿いに、幅約2mのトレンチを地表下約2.3mまで、人力とバックホウで掘削し、古代から縄文時代晩期までの遺構・遺物の有無をおもに断面観察によって確かめた。その結果、上述の遺構直下の層準で、耕作土層や溝状の掘り込みがみとめられたほ

図2 機械掘削の状況。北東方向に撮影。

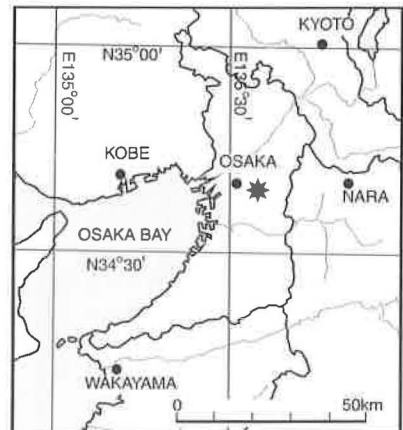


図1 宮ノ下第6次発掘調査地の位置図。

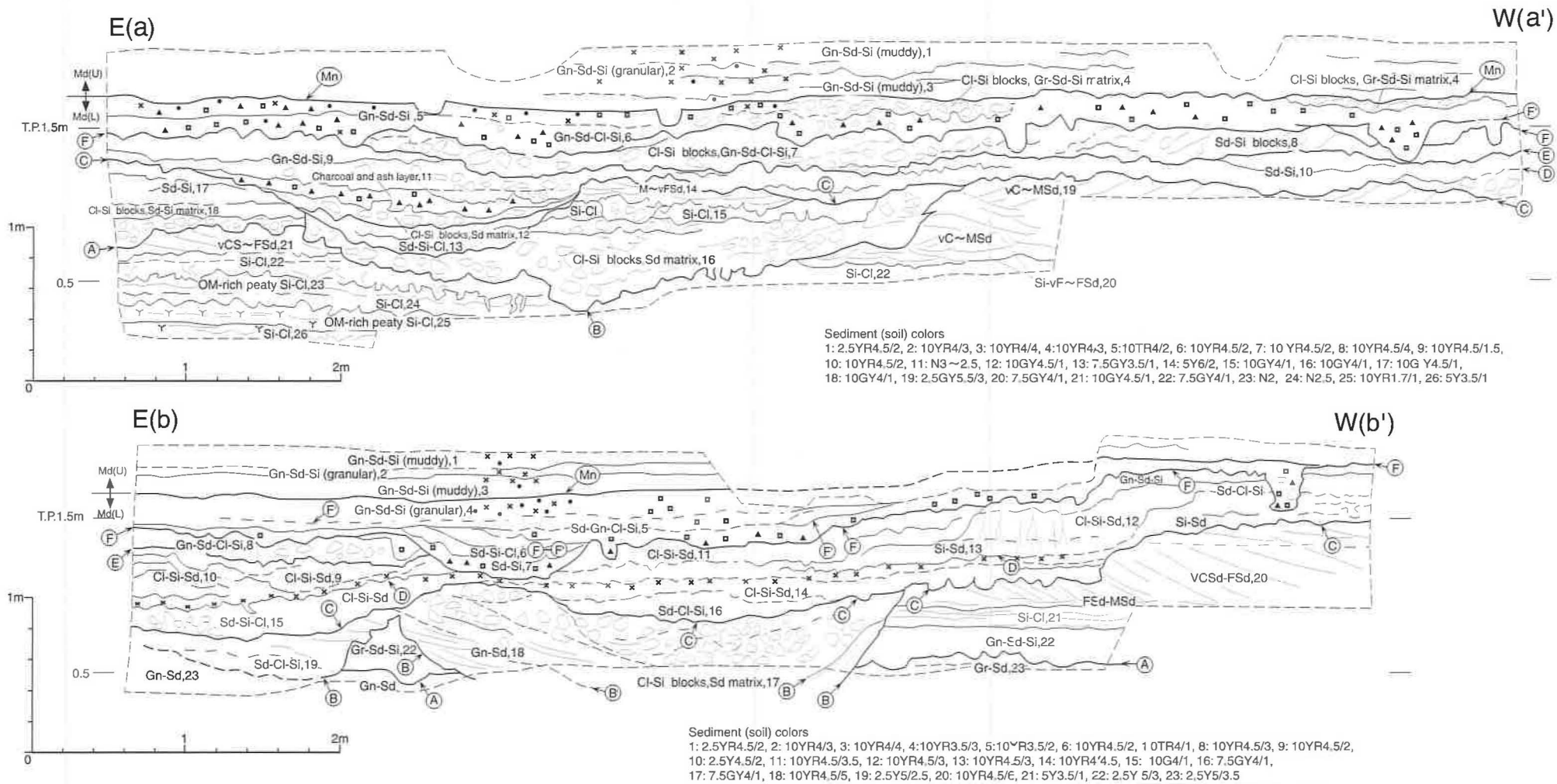
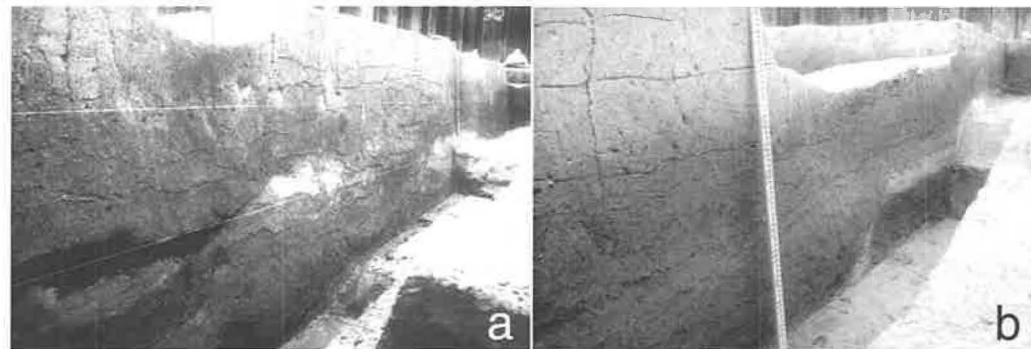


図3 調査地中央部、東西方向の堆積層断面図。断面の位置は図9に示す。図中のx印は酸化鉄の斑紋、黒丸印は酸化マンガン斑紋、黒三角印は炭片・灰の分布、四角印は遺物を示す。写真aはa-a'断面、写真bはb-b'断面。いずれも南西方向に撮影。掘削時の地表面は、T.P.2.48m。AからFは古い順に、同時期面(D面以外は直上堆積層の下面とみなす)を示す。Mn面の上位に14世紀の耕作土層、Mn面の下位でF面までが13世紀の堆積層。C~F面までが平安時代後半の耕作土層。中央のブロック土で充填された落ち込み(溝)は土取り穴と考えられる。A面の上に奈良-平安時代の耕作土層が載る。a-a'断面の東端T.P.0.5m付近には、古墳時代初頭の黒色泥層がみられ、その上部と上位層は古地震による変形構造をなす。T.P.0.3m付近の植物遺体と分解有機物に富む泥層は弥生時代中期の堆積層で、その上部にも古地震による変形構造がみとめられる。



か、約40cm下の層準で耕作土層がみとめられた。堆積層の年代を推測できる遺物は出土しなかったが、近隣の調査地との層序対比から、平安時代と奈良-平安時代の遺構と考えられる。トレンチ底のより下位の古墳時代、弥生時代の層準では、遺構・遺物は検出されなかった。現地の調査は6月29日に終了し、その後、出土遺物と現地での記録の整理を行った。

2 調査結果の概要

2.1 堆積層と遺構

当初の計画では機械掘削は深度0.8mであったが、調査区西部では、深度約0.6mで柱穴・溝などの遺構が検出された。宮ノ下遺跡の西縁部には、地形の判読から南南東-北北西にのびる自然堤防がみとめられ、この高まりを足がかりに歴史時代の人間活動が展開されたと想像される。本調査地付近ではおおむね西に高く、東に低い緩やかな傾斜面をなす。弥生時代から古墳時代に展開していた「河内湖」の湖水域ないしは湖岸の平坦な地形環境に、河川堆積物が流入し、河道と自然堤防が発達し起伏に富む地形に変遷してゆくのは、古墳時代後期以降で、その最盛期は奈良-平安時代と考えられる。その後、耕作地造成という人為の地形形成営力が、再びこの地を平坦化したことは図3の断面図に示した堆積層の累重からもうかがえる。

2.2 14世紀以後の遺構

盛土および最新の耕作土層の下位層準では耕作地跡が検出された(図4)。ほとんどは鋤跡だが、まれに畦畔と思われるものがあった。おおむね南北方向にはしる。調査区西半のこの検出面のわずかに下位より14世紀代のものと考え

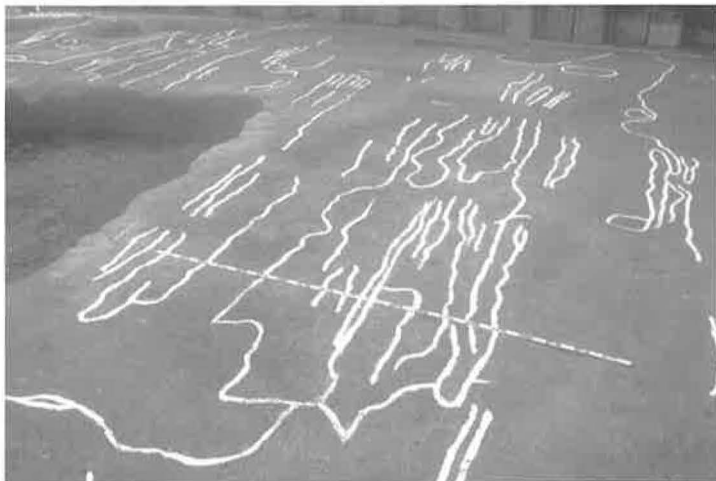


図4 14世紀後半第の耕作地跡。南東方向に撮影。スケールは2m。

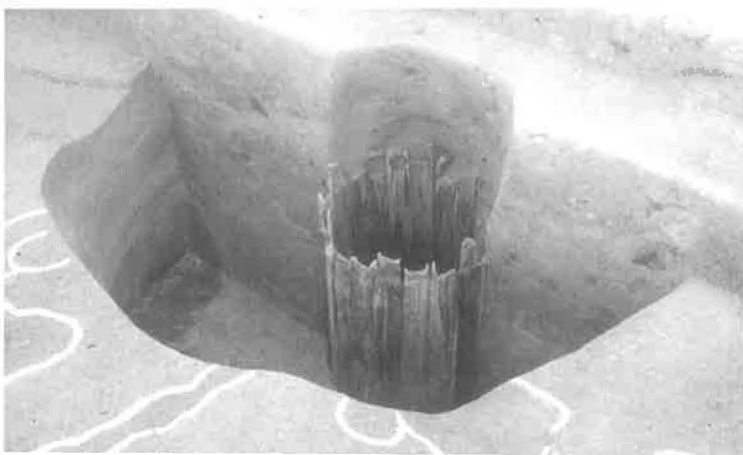


図5 耕作土層中に挟まれた土器溜まり。おもに14世紀後半の瓦器椀、土師皿からなる。a:東半中央部の土器溜まり。東向きに撮影。b:南西部、図6の井戸の北隣で検出された土器溜まり。東向きに撮影。



図6 14世紀代の遺物を含む堆積物で充填された井戸。遺物は再堆積で、井戸の築造年代はより新しいと思われる。スケールは約1.5m。南西方向に撮影。



図7 中世耕作土層の上部を除去した状態。図3のMn面。これより下位で13世紀代の遺物が出土した。おもに調査区東半に鋤跡が分布した。南西方向に撮影。

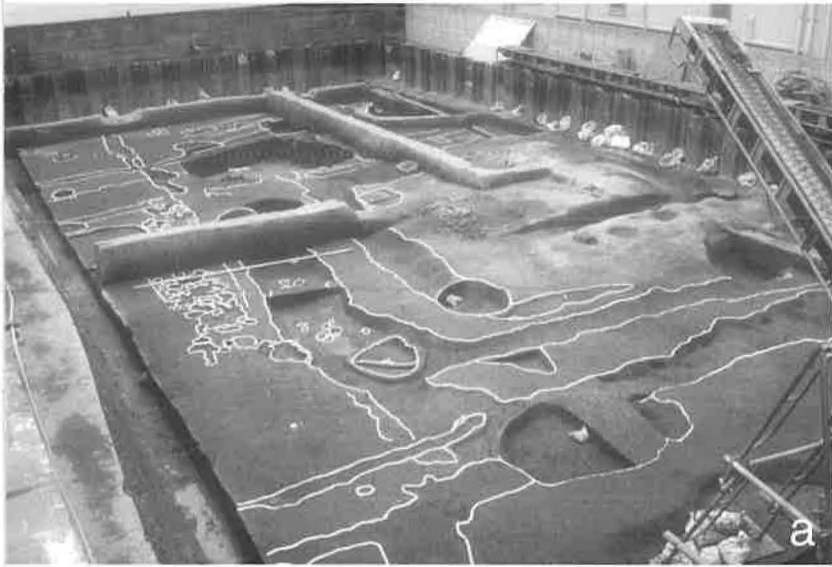
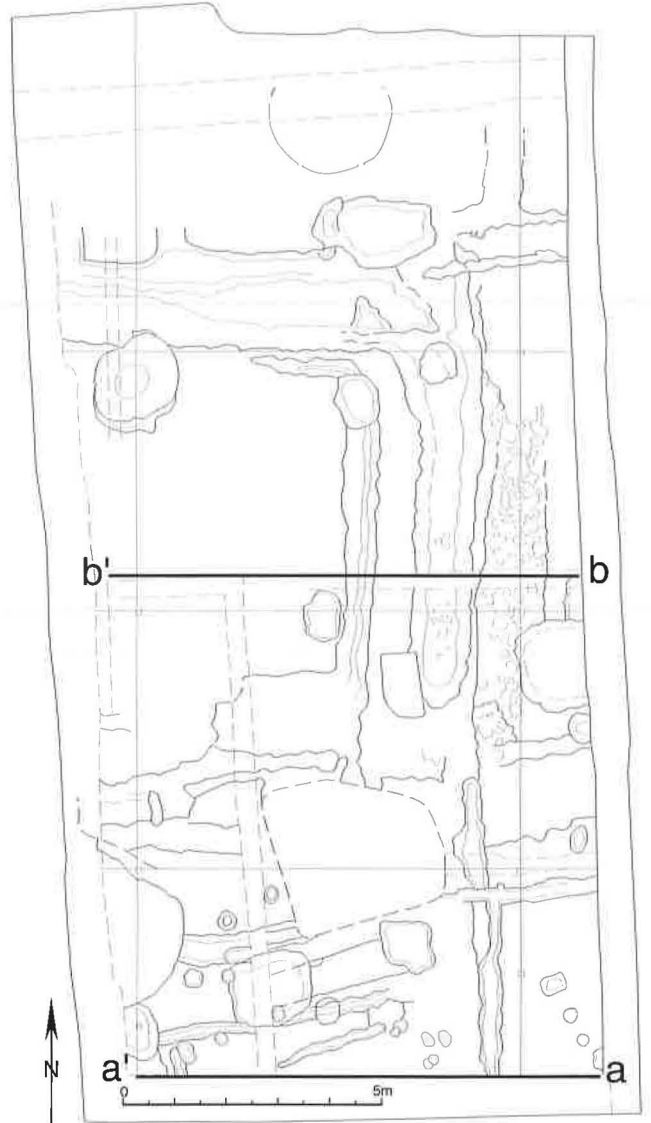


図8 図3F'面での遺構検出状況。a: 全景。ほぼ南西方向に撮影。b: 調査区西寄り中央部の台状遺構。西北西方向に撮影。スケールは2m。写真中央の土器溜まり(図11)は、この面より下位層準の遺物で、試掘時にすでに露出していたもの。

図9 13世紀堆積層上部の遺構検出面(F'面)の実測図。図8と同じ面。



られる土器がしばしば円形ないし線状に集合して出土した。

調査区東半中央部の中世耕作土層の上部では土器溜りが検出された。おもに14世紀後半の瓦器椀・土師器皿からなる。ここでは線状に分布する(図5a)。遺物が含まれる堆積層に遺構がみとめられないことから、集落縁辺の廃棄の場所か、土地改変の際に動かされた土(盛土)とともに、寄せ集められて埋没した再堆積物と考えられる。調査区南西部では、極浅い土壙状のくぼみに土器が密集して検出された(図5b)。

調査区南西隅で直径約90cm、深さ約2.3m、掘方の直径約3.6mの井戸が検

出された(図6)。上端部に四角い穴をあけた桶板を立て並べたもので、上下2段に積んでいたが、上部はほとんど残存していなかった。井戸枠内の堆積層からは14世紀前半の瓦器碗が出土したが、層序的にはこの築造・埋没年代はやや下るものと考えられる。

14世紀代の遺物を含む堆積層を除去した検出面は、酸化マンガンの斑紋や結核が密に沈着して、暗褐色であった。堆積物の粒径はやや礫質。写真は北東隅より撮影。調査区西半はやや高く、東半は低い。東半では東西方向に平行する鋤跡が検出され、西半の領域と境するかたちで調査区中央を南北方向に数条の鋤跡ないしは溝の痕跡が検出された。土色に幻惑されて、検出できなかったが、断面観察から、下位層準にみとめられた柱穴群(図10, 12)の一部がこの層準付近から形成され、居住域(あるいは建物分布域)が耕作地に改変されたと考えられる。西半中央部では、台状遺構の上部が露出し、柱穴などがみられた(図7)。

2.3 13世紀の遺構

上述した耕作土層を除去すると、溝、足印群、いくつかのピットとともに、調査区西半中央部で台状遺構が検出された(図8, 9)。この検出面をF面と呼ぶ。南北幅が約5.5m。南辺の溝が不鮮明だが、2重の溝に囲まれている。所ど

図10 13世紀堆積層下面(F面)で検出された遺構の分布図。a: 同じ岩相の堆積物で充填された遺構を分類した。A0: 黒色で炭・灰を含む砂質シルト。A1: 炭・灰と黄色のブロック土を含む砂質シルト。B: 黄灰色の砂礫質シルト。C: 暗灰褐色の砂礫質シルトで、黒褐色のシルトブロック土、土器片をわずかに含む。D: 灰褐色の砂質(粘土質)シルトのブロック土。E: 灰色砂質シルト。ハーフトーンの線はピット(柱穴)の列を示す。ピット内の黒い塗りつぶしは柱根。b: 同じ検出面の等高線図。これらの遺構は、F面、F'面それぞれの直上層準から形成されたものと、F面直下で形成されたものを含むと考えられる。

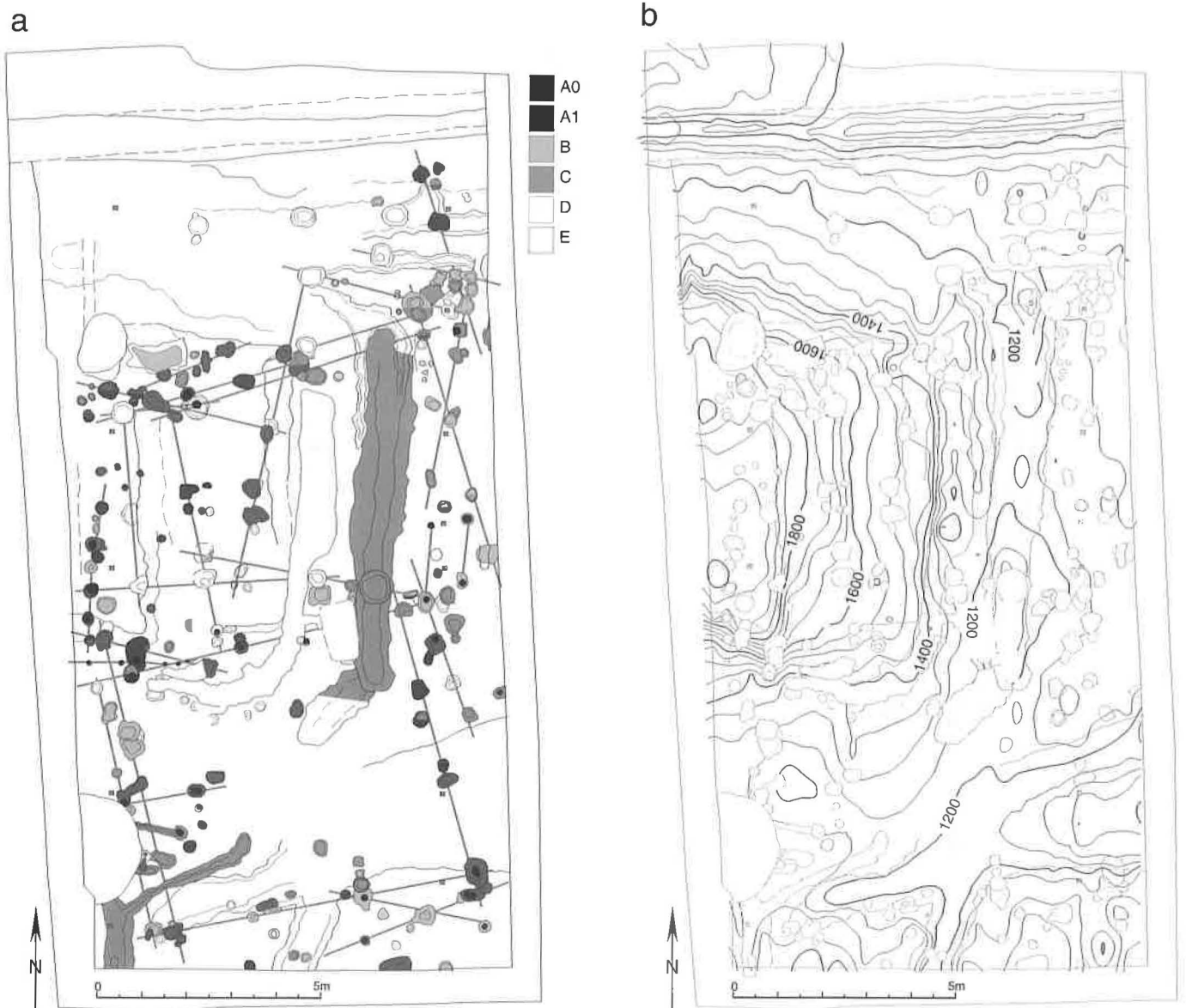




図11 台状遺構の東辺に分布する盛土に含まれる遺物。瓦器碗、土師器皿など。北西方向に撮影。スケールは約1m。

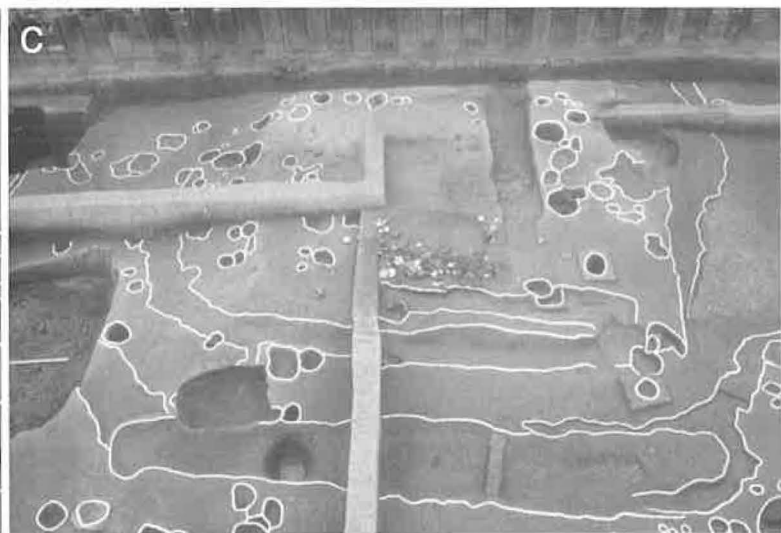
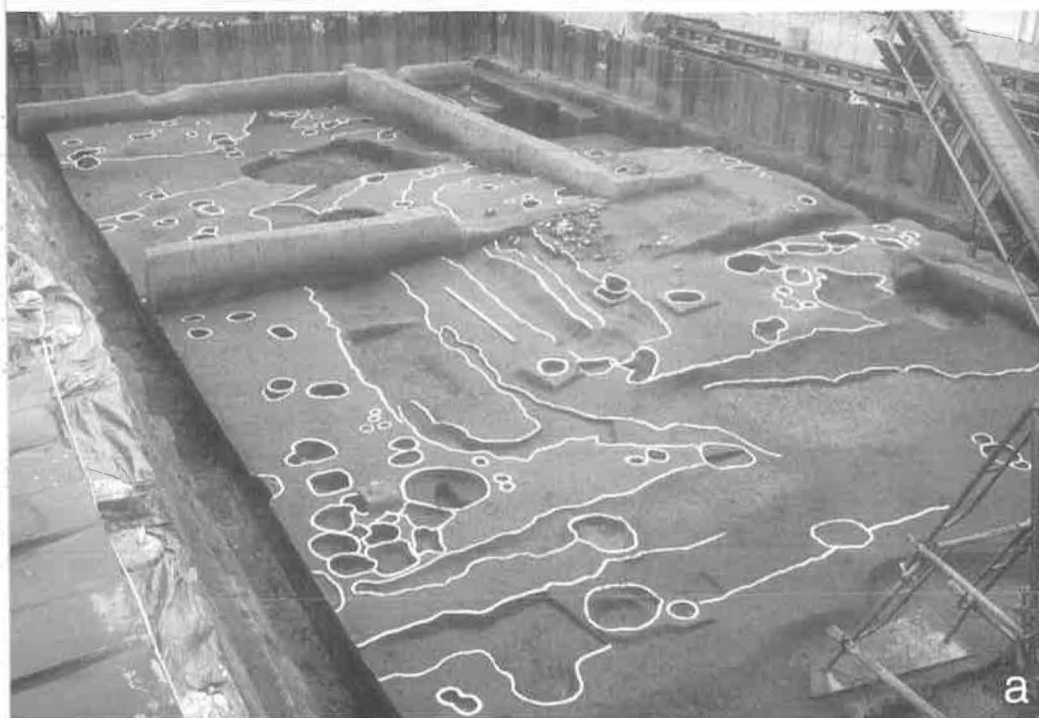


図12 13世紀堆積層下面(F面)の遺構検出状況。図10と同じ検出面。a：検出面の全景。南西方向に撮影。b：調査区南部の遺構検出状況。西南西方向に撮影。中央のスケールは2m。c：調査区中央部、西寄りの台状遺構付近の遺構検出状況。西向きに撮影。

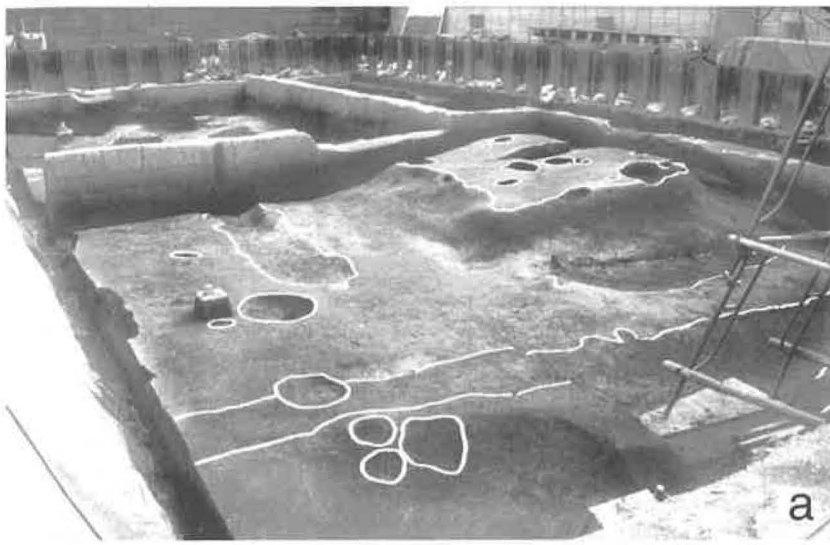


図13 D面での遺構検出状況。F面のベースとなる耕作土および盛土を除去した状態。a: 全景。南西方向に撮影。b: 中央部西寄りの台状遺構の状況。その周辺では、古代の耕作地のベースとなった礫質砂層の一部が露出している。西向きに撮影。c: 調査区南東部の状況。南西方向に撮影。溝、ピット、井戸などが検出された。

ころに柱穴が黒い斑点でみとめられる。溝と同時期の柱穴が含まれる可能性が高いが上部の堆積層が削平されており、離散的に分布するため確証を欠く。内側の溝は浅く、外側の溝は一段低く深い。後者は湛水状態が継続したらしく、泥が堆積していたが、前者は直上に分布し、多くの土器や炭・灰を含む盛土に充填されていた。南辺の一部では東西方向の杭列が検出された。足印が不定形なピットとして多数見つかった。

台状遺構の東辺は遺物多数含む盛土(整地層)に埋められていた。瓦器碗・土師器皿・釜など13世紀前半の遺物を含む。この堆積層は調査区のはほぼ全域に分布し、しばしば炭・灰に富む部分があったが、もっとも遺物が密集するのは台状遺構の東辺であった。試掘調査で土器密集部分の南半が削りとられた。また、遺物の残った部分も堆積層の上面が失われたため、遺構縁辺での上位層との関係・整地後の形態を知ることができなかった。

この遺構検出面では柱穴群が検出された(図10, 12)。この検出面を構成する堆積層はさらに旧期の耕作土層で12世紀末頃から13世紀前半の遺物を含んでいた。この下には、数枚の耕作土層が連続してみられた。F面の下、5~40cmには、酸化鉄の斑紋が顕著にみとめられる層界があり、耕作土層の一つの下面と考えられる。この検出面(D面と呼ぶ。図13)では、上位層準で掘り残した遺構のほか、耕作土層中で形成されたと考えられる曲物杵をもつ井戸(図14)、土師器皿を廃棄、あるいは埋納したと考えられる土壇(図15)、南西-北東方向の溝(図13c)などが検出された。

台状遺構は、集落縁辺の耕作地造成に際して、繰り返して整地されており、掘立柱建物跡と重複して検出されたが、そのプランは柱穴群の配列とかならずしも調和的ではなかった。堆積層断面の観察の結果、下位層準(平安時代)の耕作地造成に際し、礫質砂層の削り残し(あるいは削り出し)が、周囲の耕作土の累重と溝の掘削によって成形されつつ残存したもので、耕作地の一部をなす造作と考えられる。この東側には多くの瓦器、土師器が投棄されていた。これらの遺物の年代から、台状遺構は13世紀末にはわずかな高まりを残し、ほとんど埋没したと考えられる。

図14 D面の調査区中央部東寄りで見出された曲物杵の井戸。上部は上位の耕作地造成によって削平されたと考えられる。図13cの画面下部の井戸と同じ。ほぼ西向きに撮影。



図15 台状遺構の平坦面南部、南北方向のあぜにかかって検出された土壇(pit309)の土師器皿出土状況。D面直上で形成された遺構と考えられる。南向きに撮影。



図16 調査地東壁北端部の堆積層断面。スケールの塗り分けは1m。説明は本文参照。

図3の断面図下部中央に示したように、砂礫をマトリクスとする粘土偽礫に充填された、作土のための土砂取り溝と考えられる、幅2m強の溝がみとめられる。その充填堆積層から黒色土器細片が出土した。さらに断面図右下端には、洪水堆積物である砂礫層と静水域の泥層の下位に、周辺の調査における層序から奈良-平安時代のもとと考えられる耕作土層がみとめられた。

調査の最終段階で掘削した東西両辺に幅2mのトレンチで弥生時代の堆積層まで掘削し、宮ノ下遺跡1次・2次・3次調査で検出された同時代の堆積層の拡がりを確かめた。代表的な堆積層断面を図16に示す。試掘調査では土器片が1点出土したが、本調査では全く採集されなかった。断面中部の明色の砂礫層より上が、中世から近代までの耕作土層。下方に奈良-平安時代の耕作土層、古墳時代の泥層、古墳時代前期から弥生時代後期の亜泥炭層、弥生時代中期から前期および縄文時代晩期の泥層である。断面左方には、おもに泥で充填された井路と、その泥の偽礫とベースの砂で充填された土砂取り溝の14世紀以来の掘削・埋積の繰り返しがみられ、南側(写真右方)の耕作土と指交していた。

2.4 出土遺物

出土遺物は少量の14世紀代の遺物と13世紀前半の遺物が出土した。前者は、とくに炭片・灰が多くまじった堆積層から出土したもので、台上遺構の東辺や土壌に集積していたものが目立ったが、全体の出土量からみるとさほどでもない。多くは、いわゆる「包含層」とも呼ばれる盛土層、耕作土層に含まれていた。代表的な遺物の写真と実測図は10ページ以下に示した。堆積層と出土土器との関係をデータ化するため、現地での遺物採集グループ(フィールドネームのまま示す)と層序の関係を図17に示す。が、各採集グループに含まれる全遺物のデータベースは、添付のフロッピーディスクに記録した。その際、瓦器碗の口縁部と底部、土師器皿の口縁部の断面形状、調整痕に注目し、破片を分類した(図18~20)。完形遺物の編年からみると、これらの分類項目には、新旧の遺物がいくらか混在するが、二、三の特徴は、既存の編年と調和的と思われる。この点を利用して、遺物タフオノミーを目指した統計解析が今後の課題である。

3 まとめ

宮ノ下遺跡第6次発掘調査では、地表下約0.6~1.8mまでの堆積層の累重中に、近世から14世紀にさかのぼる耕作地跡、土壌、井戸、13世紀の耕作地跡、掘立柱建物跡をともなうピット群、溝、土壌、井戸と、以上の期間に埋め戻し、掘削が繰り返された井路ないし土取り溝(穴)などが検出された。また、より下位の、地表下約2.0m付近では、奈良-平安時代のものと考えられる溝、耕作土層がみとめられた。13世紀前半の遺構検出面の上に分布する炭・灰まじりの盛土層や遺構の充填堆積物からは、多くの瓦器碗、土師器の皿、釜、白磁と青磁の碗などが出土した。調査は地表下約3.1mまで行い、古墳時代、弥生時代、縄文時代晩期の堆積層を確かめたが、遺物は出土しなかった。本調査ではおもに、いわゆる「足代庄」として発達した奈良-平安時代以後、近世までの集落跡と耕作地跡の一部が明らかになるとともに、集落縁辺での土地利用のめまぐるしい変化が印象的であった。

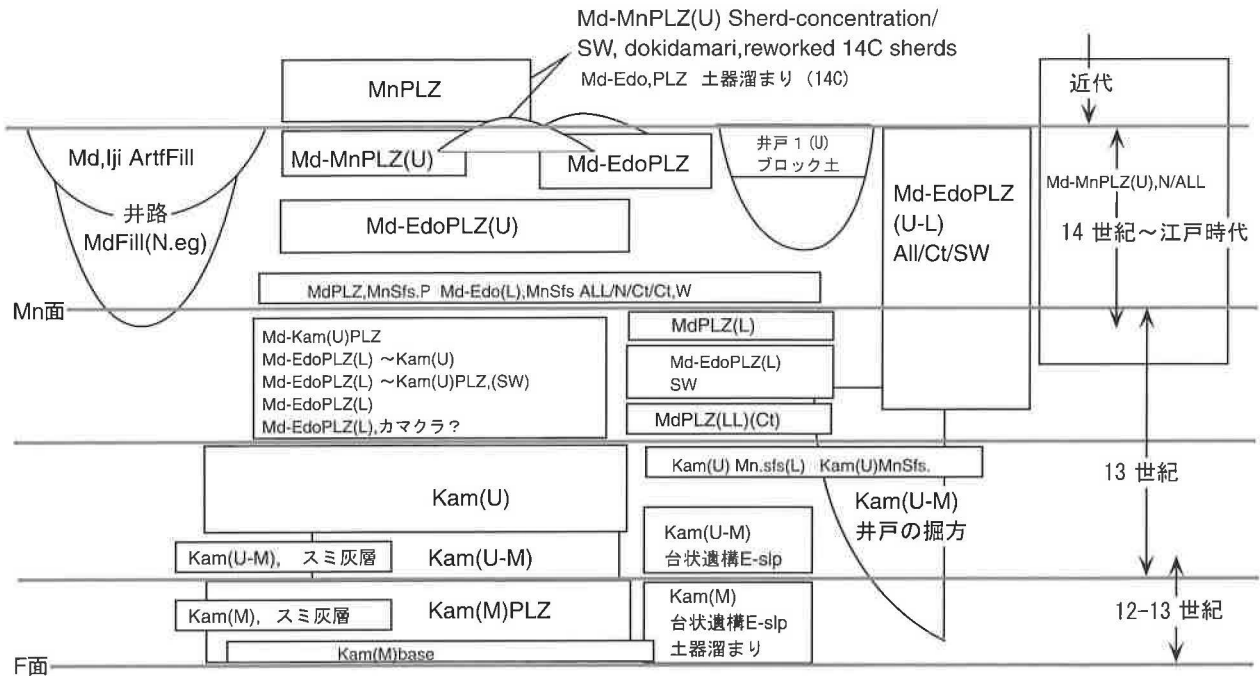


図17 遺物採集グループ（付録FDのデータベースで用いた）とその層序的位置関係の模式図。右端の時代・時期は遺物の概観による。

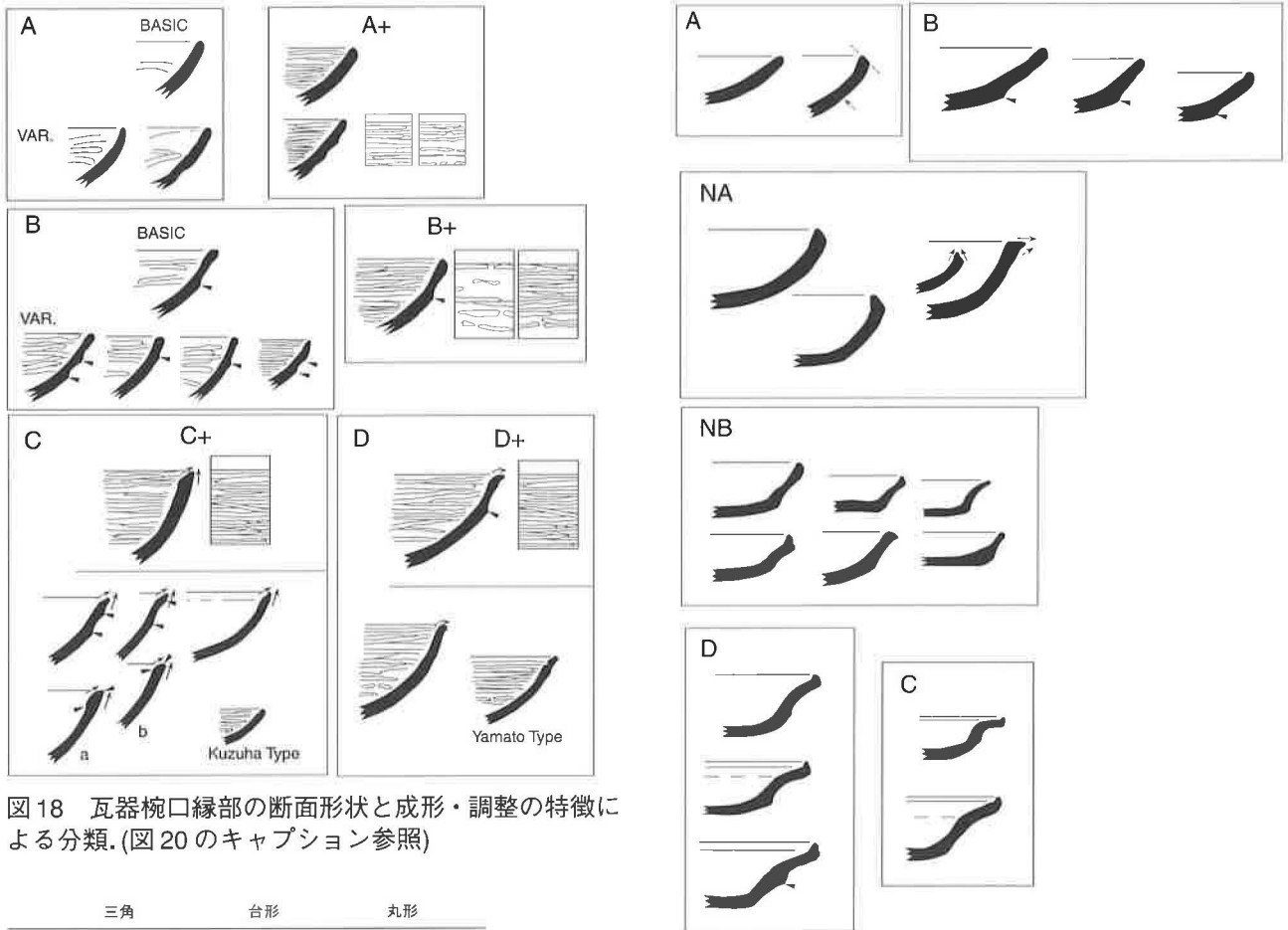


図18 瓦器椀口縁部の断面形状と成形・調整の特徴による分類。(図20のキャプション参照)

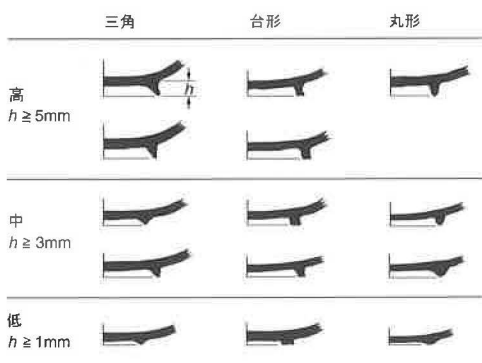
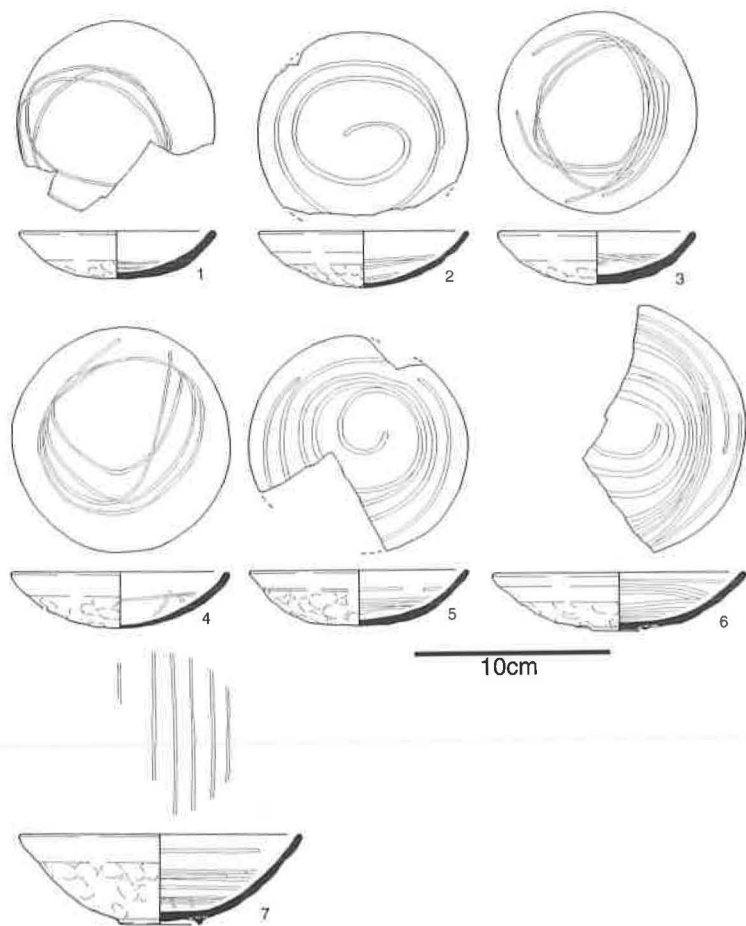
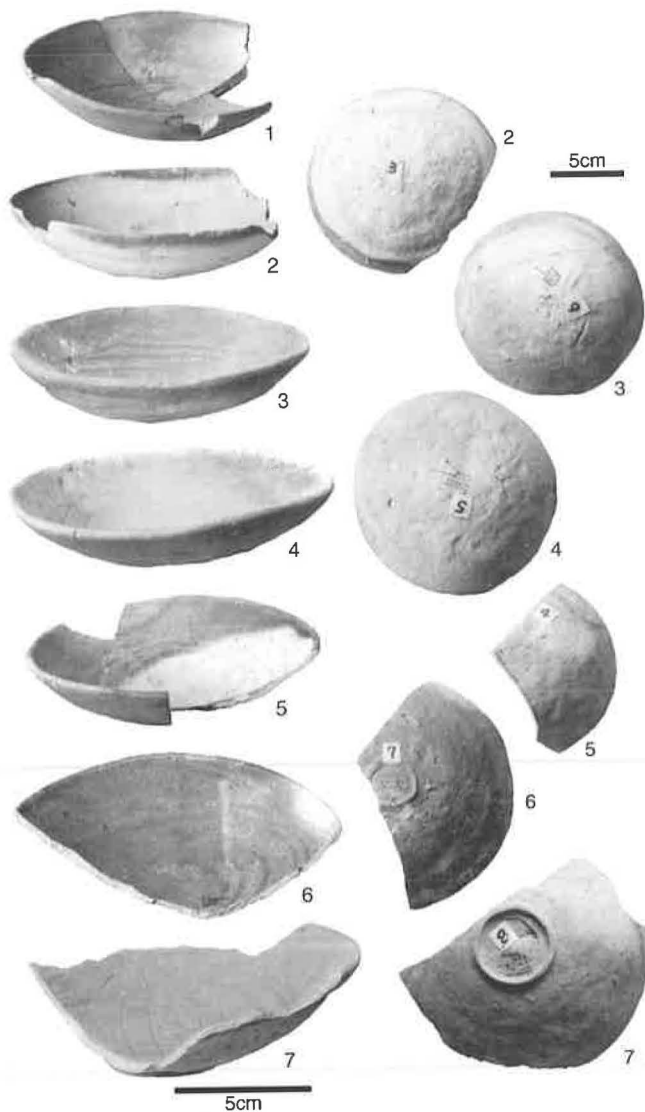
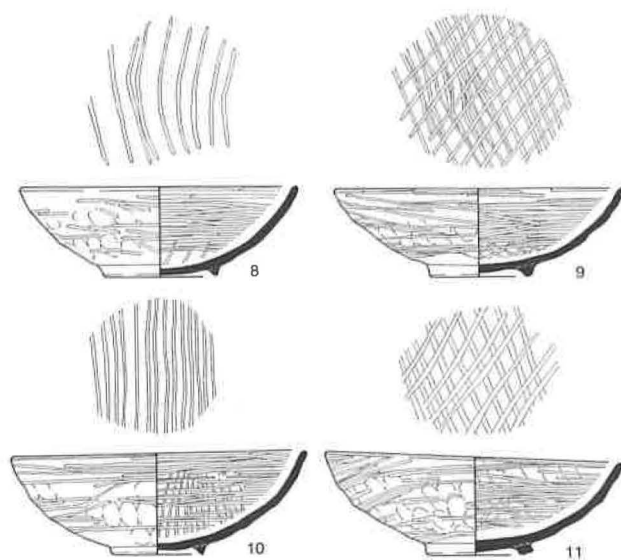
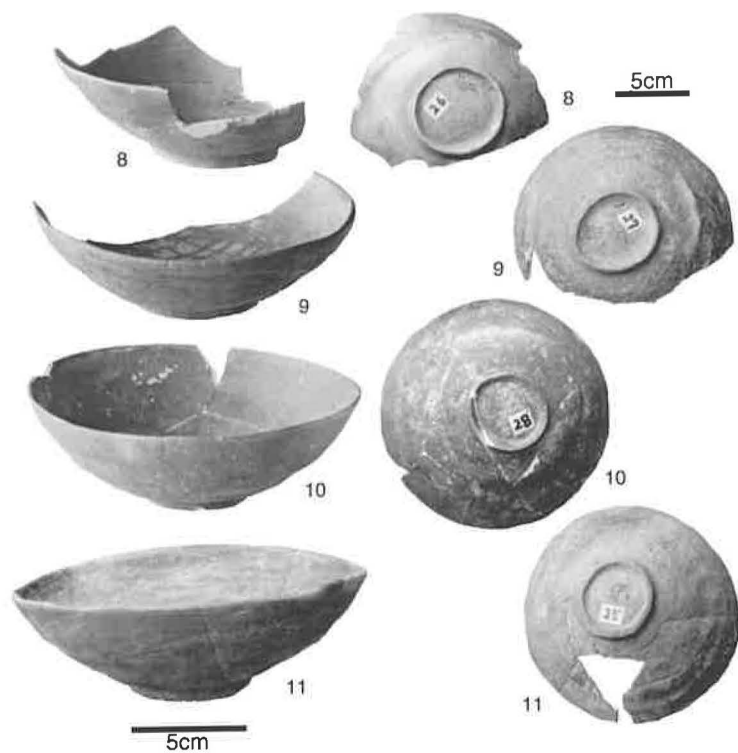


図19 瓦器椀高台の高さと断面形状による分類。

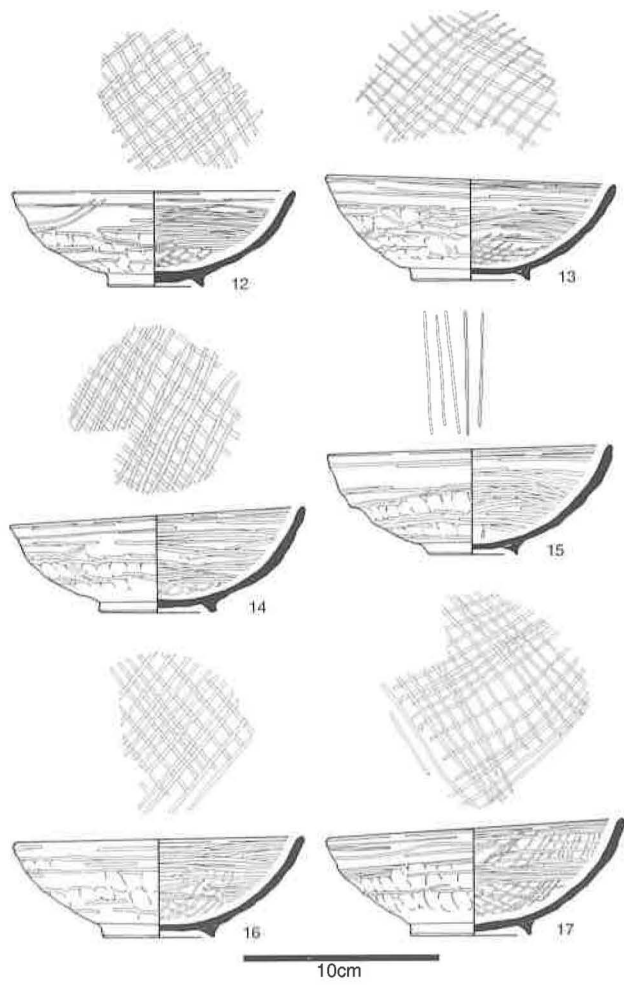
図20 土師器皿口縁部の断面形状と成形・調整の特徴による分類。矢印は1回のナデ方向に直交して生じる断面形状、黒三角は強いヨコナデによって生じた稜線を示す。



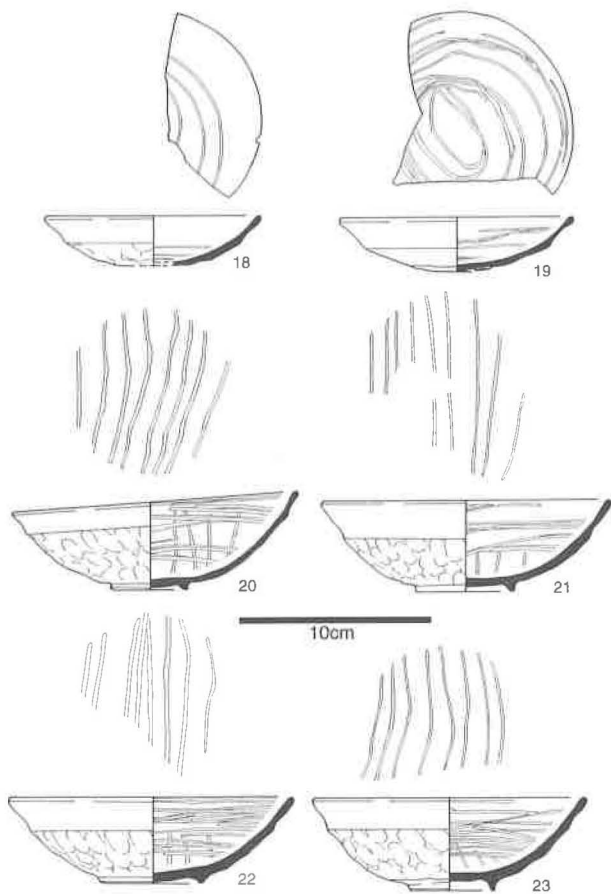
1~7 瓦器碗 (図18のA)



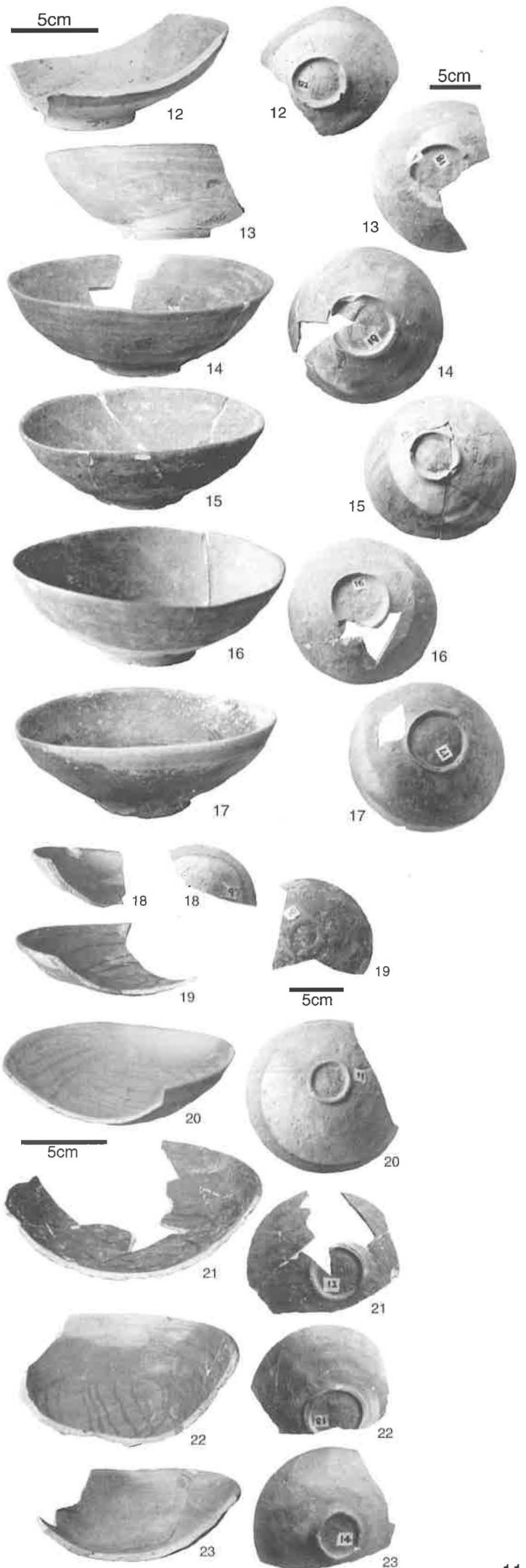
8~11 瓦器碗 (図18のA+)

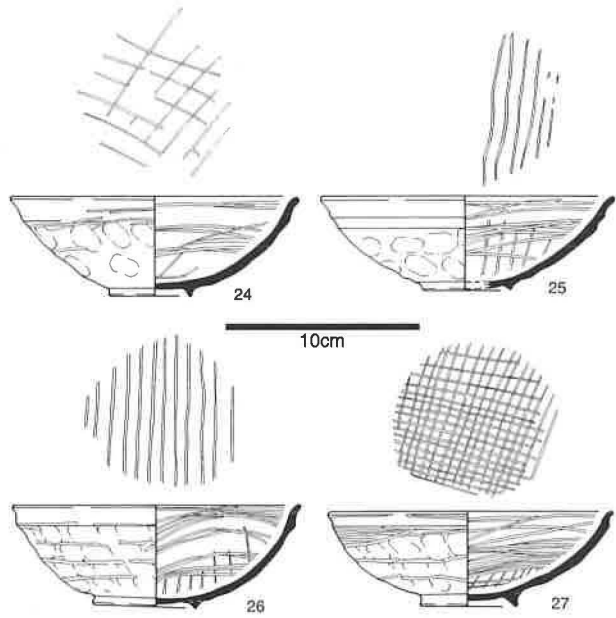
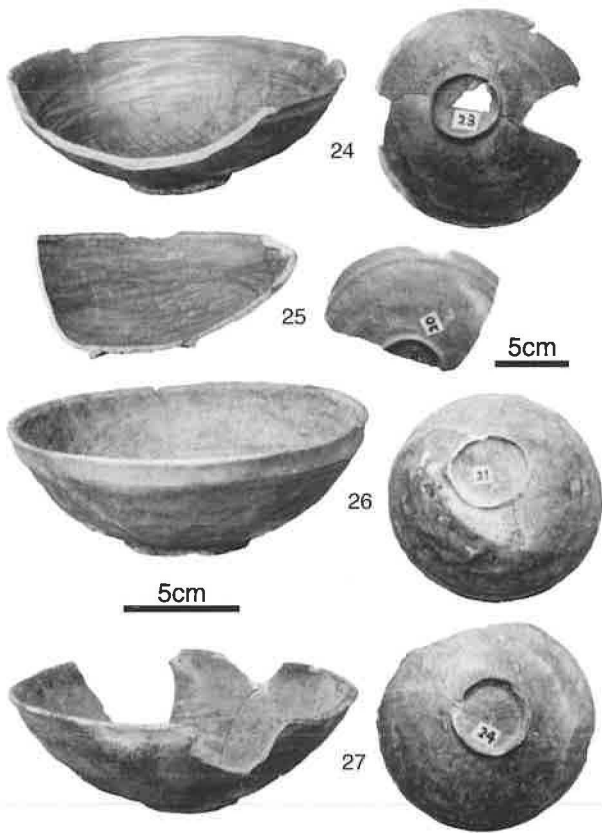


12～17 瓦器碗 (図18のC)

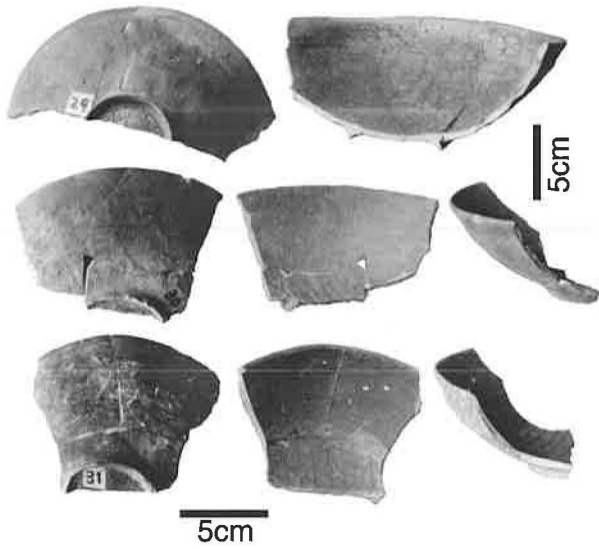


18～23 瓦器碗 (図18のB)

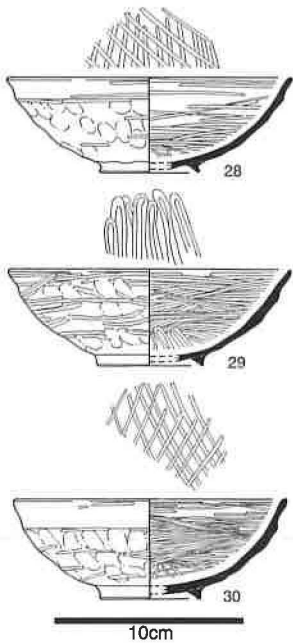
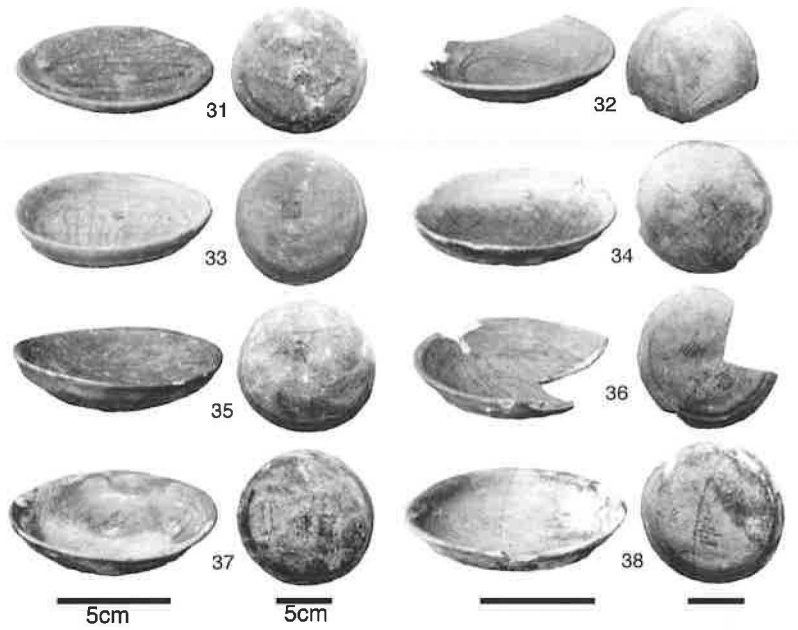




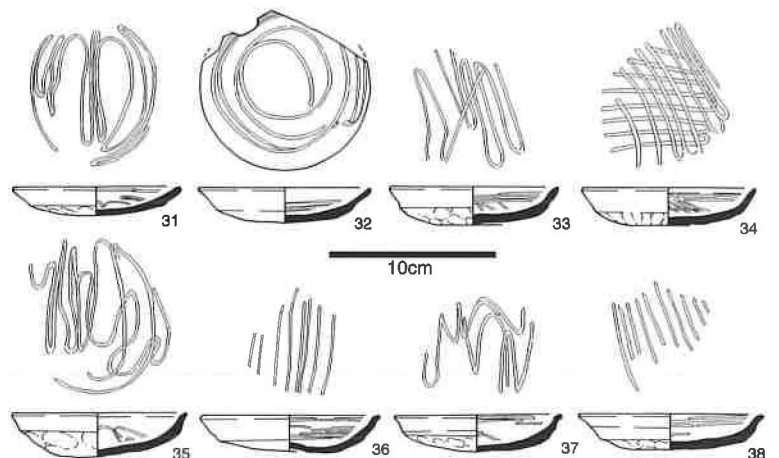
24～27 瓦器碗 (図18のD)

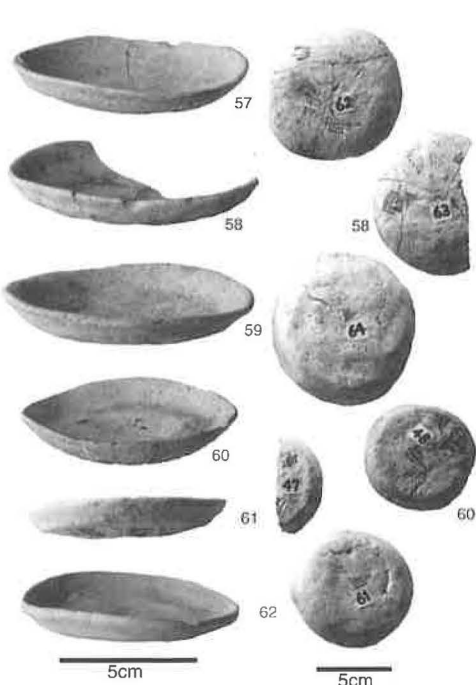
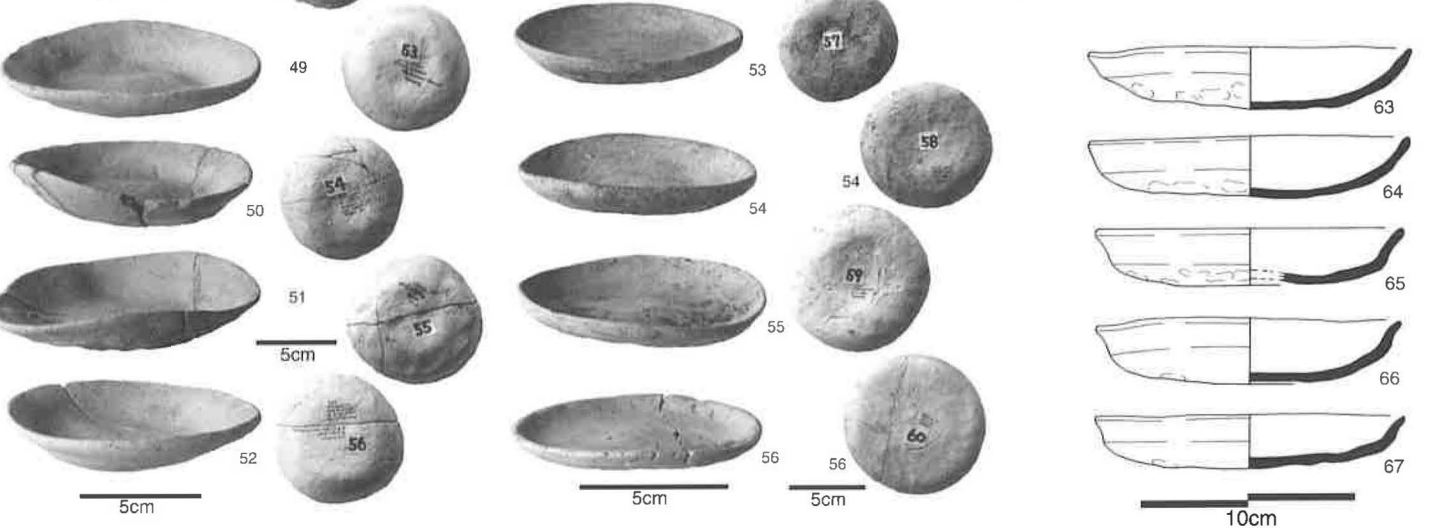
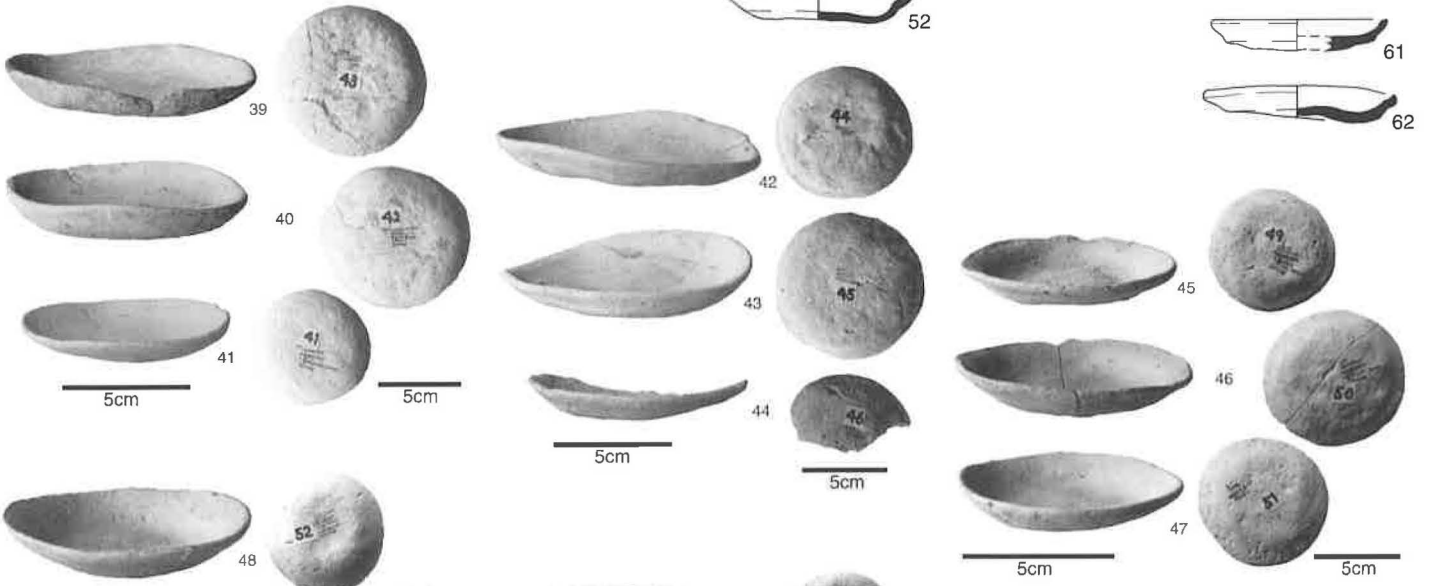
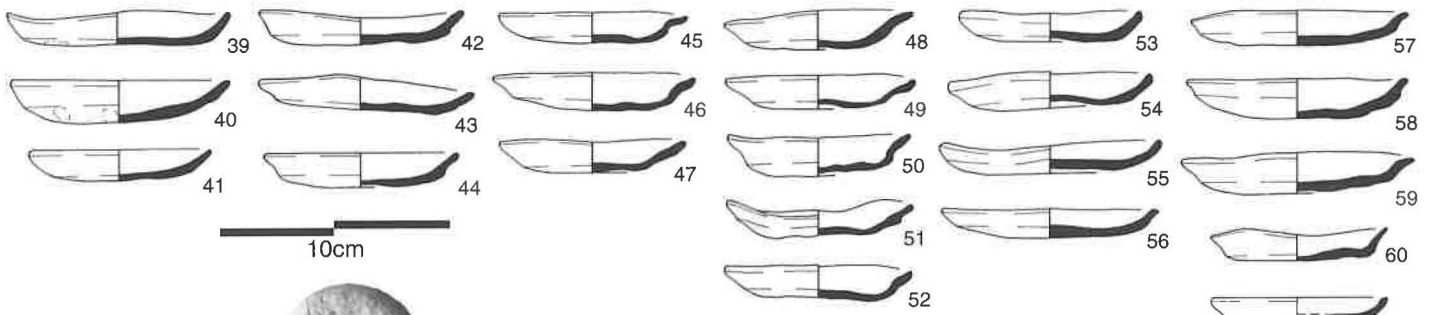


31～38 瓦器皿



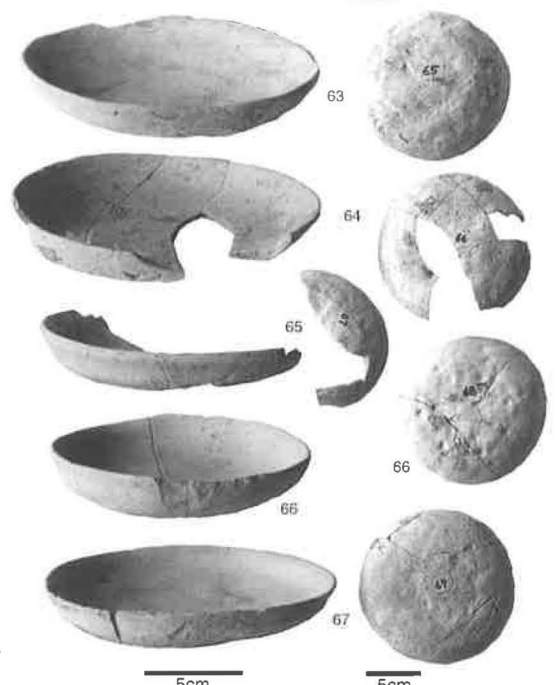
28～30 瓦器碗 (図18のB+)

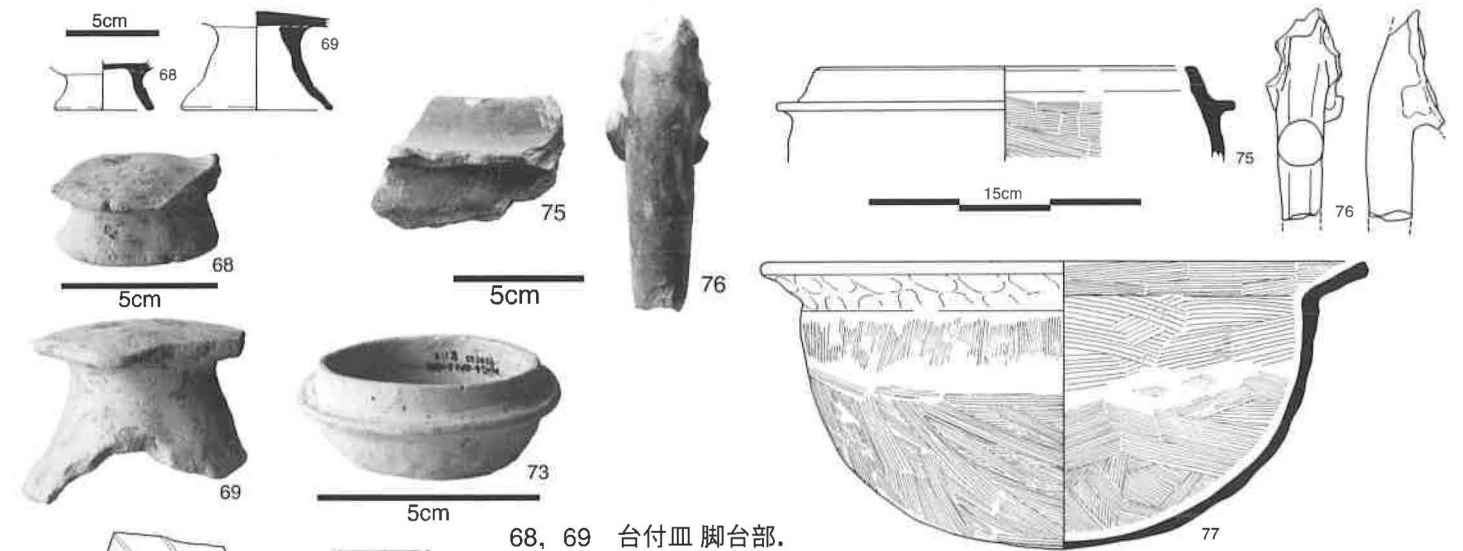




39 ~ 62 土師皿
 (39 ~ 41 ㊦ 20A
 42 ~ 44 同㊦ B
 45 ~ 47 同㊦ C
 48 ~ 52 同㊦ D
 53 ~ 56 同㊦ NA
 57 ~ 62 同㊦ NB)

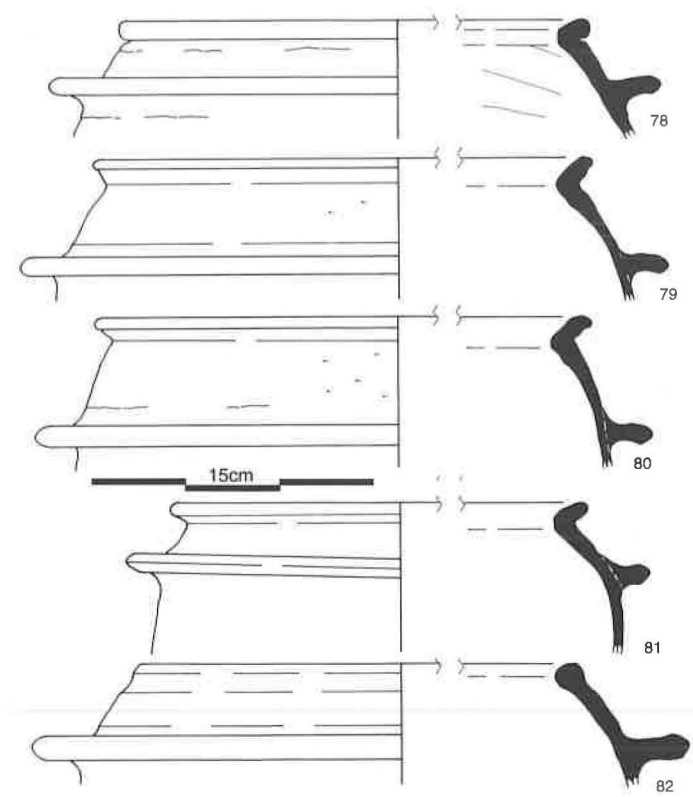
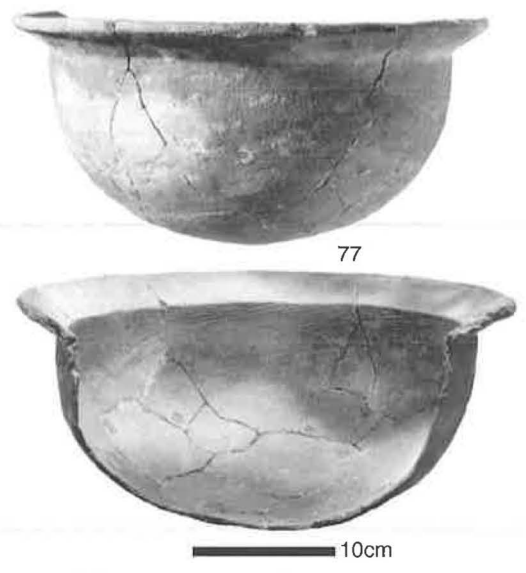
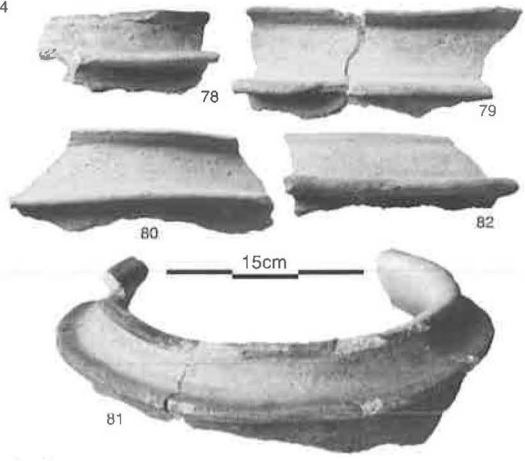
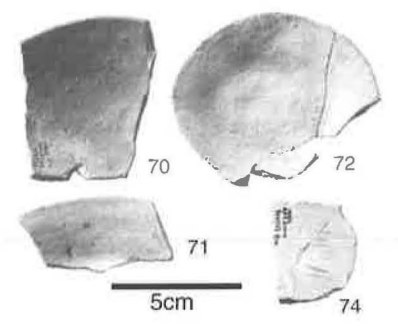
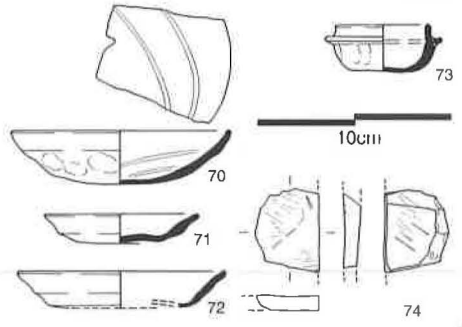
63 ~ 67 土師器大皿



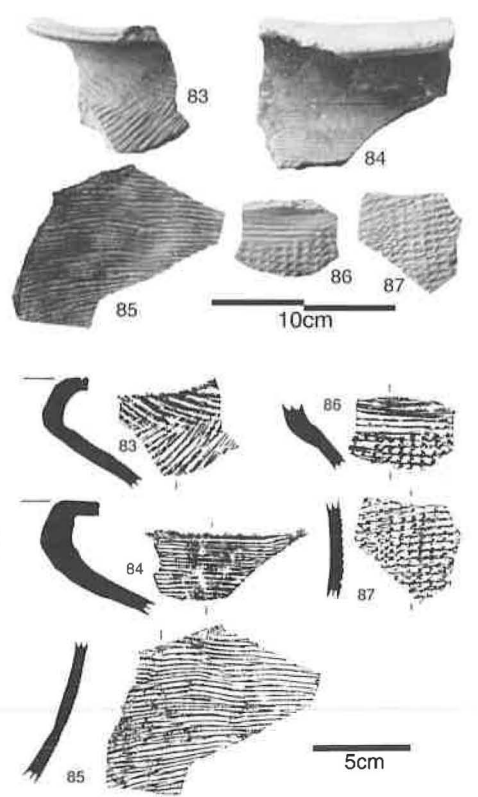


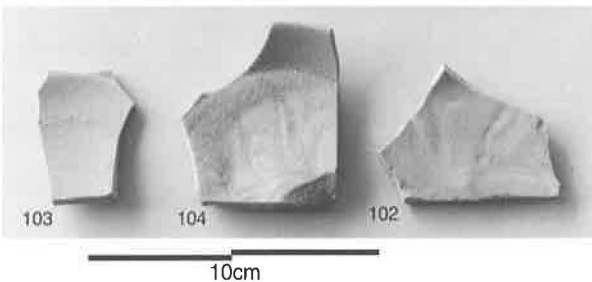
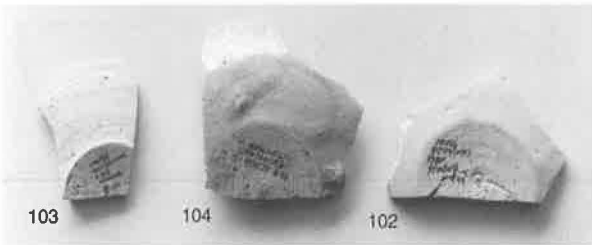
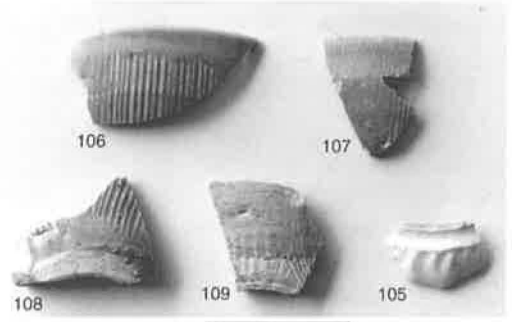
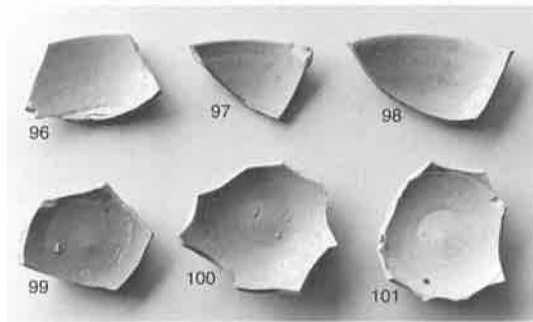
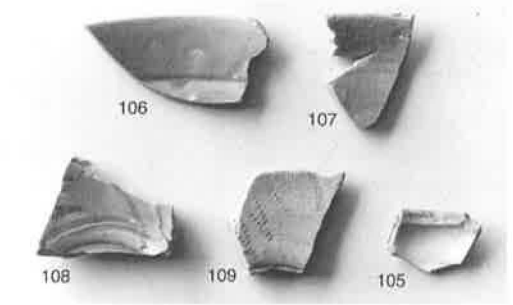
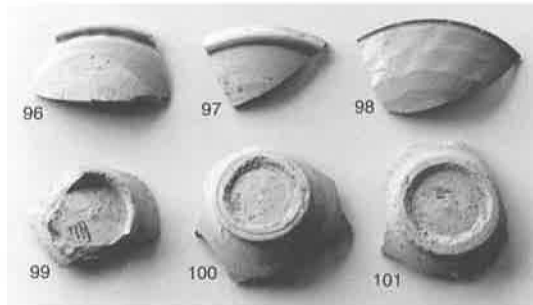
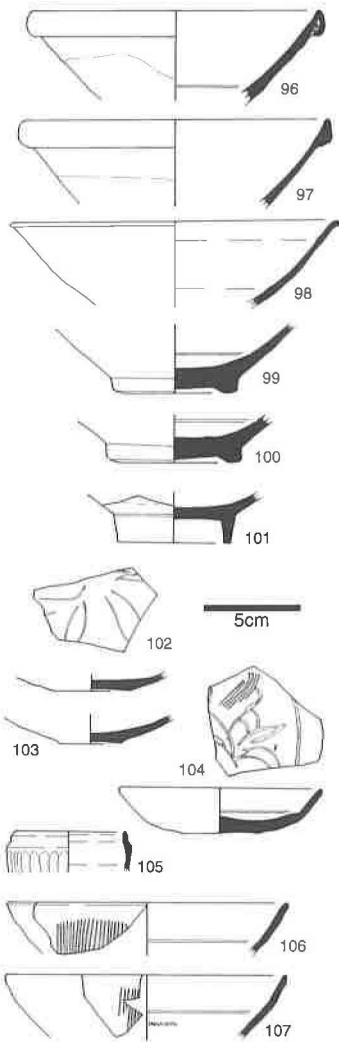
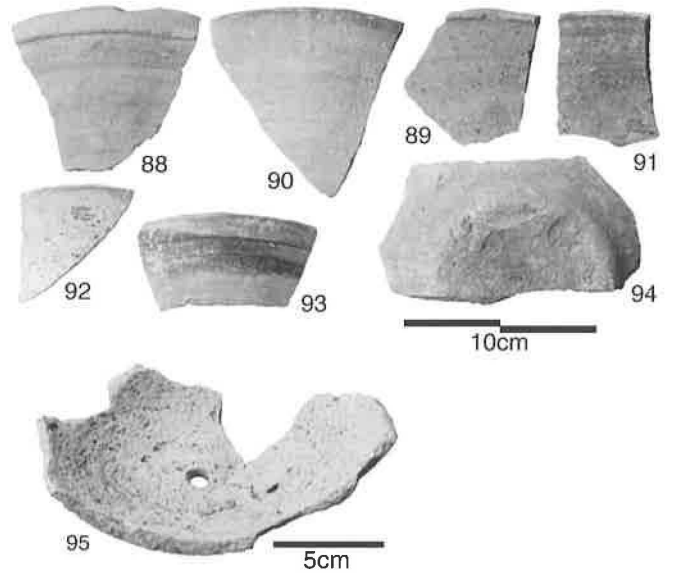
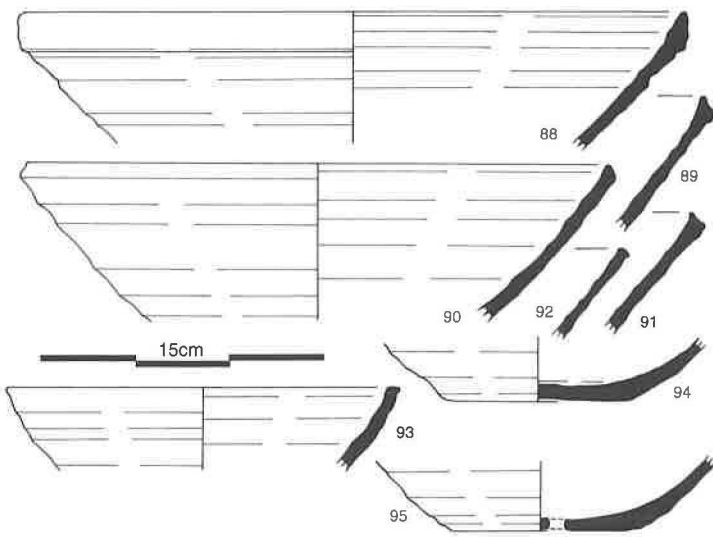
68, 69 台付皿 脚台部。

70～74 井戸2堀かた出土土器。
瓦器椀，土師器皿，羽釜ミニチュア，
砥石，
75 瓦器 三足釜，76 三足釜の脚，
77 土師器鍋

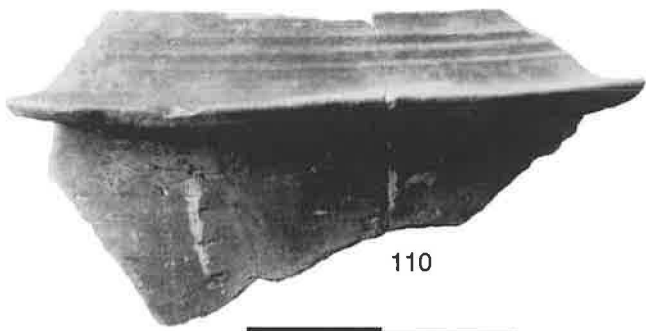


78～82
土師器 羽釜
83, 86, 87
須恵器 甕
84, 85
瓦器 (瓦質土器) 甕

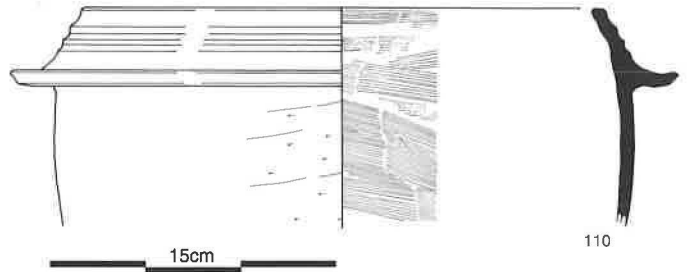




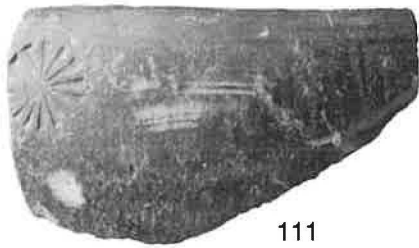
88～94 須恵器 捏鉢, 95 瓦質土器 底部を穿孔した捏鉢, 96～98 白磁椀 口縁部, 99～101 白磁椀 底部, 102～104 白磁皿, 105 青磁 合子の身, 106, 107 青磁椀 (同安窯?) 口縁部, 108, 109 青磁椀 胴部下半部, 110～113 井戸1 井戸枠内下部出土遺物 瓦器 羽釜, 瓦器 火鉢, 丸瓦, 平瓦, 114 砥石 (流紋岩製), 115 硯 (頁岩製), 116 陶器 唐津焼 椀, 117 瓦器 火舎の耳, 118 土師器 甕, 119～121 銭貨「XXXX」「政和通宝」「寛永通宝」



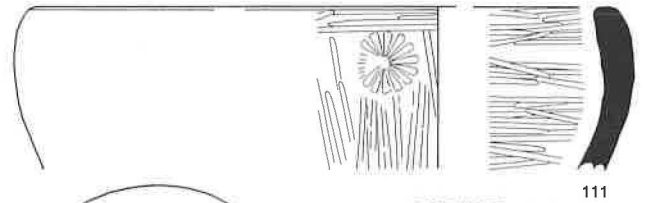
110



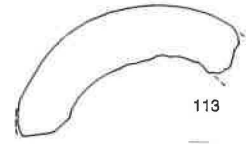
110



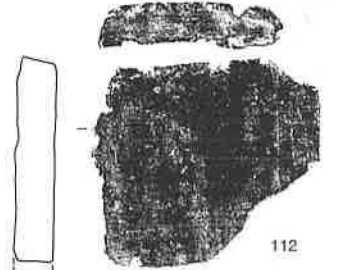
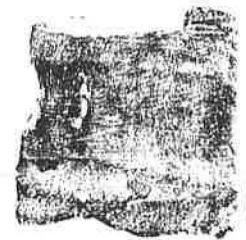
111



111



113



112



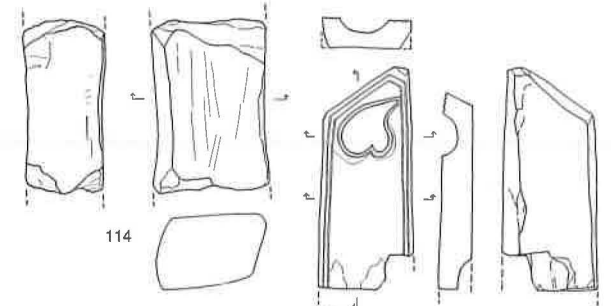
112



113



10cm



114

115



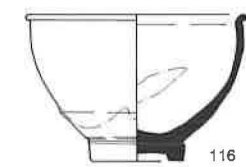
114



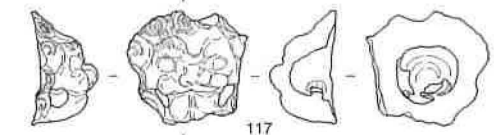
115



5cm



116



117



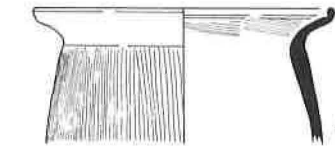
5cm

116



5cm

117



118



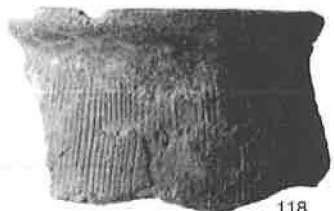
119



120



121



5cm

118



119

120

121

5cm



2cm

報告書抄録

きょうどうじゅうたくけんせつにともなう みやのしたいせきだい6じ

はくつちょうさほうこくしょ

書名 共同住宅建設に伴う宮ノ下遺跡第6次発掘調査報告書

副書名

シリーズ名

シリーズ番号

編著者名 松田順一郎

編集機関 財団法人 東大阪市文化財協会

発行機関 財団法人 東大阪市文化財協会

発行年月日 2002年12月31日

作成法人ID 42170

郵便番号 577-0843

住所 東大阪市荒川3丁目28-21

みやのしたいせき

遺跡名 宮ノ下遺跡

ひがしおおさかしちやうどう1ちやうめ70-1 70-9

遺跡所在地 東大阪市長堂1丁目70-1, 70-9

市町村コード 27227

遺跡番号 125

位置 北緯 34° 39' 58.5" 東経 135° 33' 44.6"

調査期間 平成7年4月12日～平成7年6月29日

調査面積 297.5m²

調査原因 共同住宅建設工事

種別 集落跡, 耕作地跡

主な時代 室町時代, 鎌倉時代

遺跡概要 鎌倉時代-柱穴+掘立柱建物跡+溝+井戸+耕作地跡+瓦器椀+釜+須恵器+播鉢+甕+土師皿+羽釜+青磁+白磁/室町時代-耕作地跡+瓦器椀+土師器皿

特記事項 なし

共同住宅建設に伴う

宮ノ下遺跡第6次発掘調査概要

2002年12月31日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21

電話 06-6736-0346

印刷 明文堂工業株式会社

〒577-0016 東大阪市長田西4丁目2-31

電話 06-6745-2500
